山陰海岸ジオパークにおけるジオガイドネットワークの構築とその広域化

研究員　新　名　阿津子

要　旨

本稿は山陰海岸ジオパークにおけるジオガイドのネットワークの構築やその広域化について明らかにするために、いわみガイドクラブをはじめとするガイド団体の分布や活動について分析し、ジオガイド交流会とジオコミュニケーション推進グループの活動を事例に、ジオガイドネットワークの構築について検討したものである。2010年に世界ジオパークネットワーク加盟認定を受けた山陰海岸ジオパークでは、課題とされていた内陸部の活用も進み、ジオパーク自体が来訪者／観光客の目的地となってきている。しかしながら、ガイド団体や拠点施設の多くが、特定地域やジオサイトに特化しており、行政界を超えた地域間連携の蓄積は始まったばかりである。世界ジオパークネットワーク加盟以降、ジオガイド交流会の活動やジオコミュニケーション推進グループの発足にみられるように、ジオパーク該当地域内外を結ぶ人的ネットワークが徐々に構築され始め、広域化している。今後は、形成されつつあるネットワークを活用し、ジオストーリーに基づく地域間連携で、ジオパークを推進することが望まれる。

キーワード：ジオガイド、ネットワーク、広域化、山陰海岸ジオパーク

1．はじめに

2010年10月に世界ジオパークネットワークに加盟した山陰海岸ジオパーク（以下、山陰海岸）は、京都府京丹後市、兵庫県豊岡市、香美町、新温泉町、鳥取県岩美町、鳥取市の３府県６市町で構成される広域連携のジオパークである[1]。2010年２月12日に神戸市で開催された国際シンポジウムでは、山陰海岸とレスボス島ジオパーク（ギリシャ）との姉妹提携調印式が執り行われた。さらに2011年度は研究会や国際会議といった学術会議や、山陰海岸110kmウォークやスタンプラリー、兵庫県立人と自然の博物館主催のジオキャラバンも行われ、山陰海岸内外へと広く情報発信された。

しかしながら、山陰海岸ではジオパークに関する情報のフローが個別市町内で完結される傾向にあり、来訪者／観光客にとって山陰海岸の全体像が捉えにくいのが実状であろう。というのも、山陰海岸該当地域をみると、ジオパークを構成する３府県６市町では、主要新聞やテレビ放送局など主要メディアが異なるため、他府県で行われているジオパークの取り組みについて情報共有する機会が少ない。

各地域に立地する拠点施設の中には広域情報を展示する施設もあるが、その多くが特定地域や特定ジオサイトに特化したものとなっている。また、各市町や個別団体がガイドの育成を担っているため、ガ

1　2011年10月には室戸ジオパークが洞爺湖有珠山（2009年加盟）、糸魚川（2009年加盟）、山陰海岸（2010年加盟）、島原半島（2009年加盟）に次いで５か所目の世界ジオパークとなった。これにより、世界ジオパーク加盟ジオパークが世界27か国、87か所となった。

イドの活動範囲は地域的に限定される状況となっており、拠点施設やジオガイドを介して、来訪者／観光客を他のジオサイトへ誘導していくシステムが構築されているとは言い難い。

広域連携でジオパークを推進するうえで、個別のジオサイトを物的にも人的にも充実させ、多様なジオストーリー展開を持たせていくことはもちろんのこと、ジオサイト間ストーリーを、ジオガイドを介して伝え、他のジオサイトへ来訪者／観光客を誘導することで、彼ら／彼女らのジオパークエリア内におけるフローが創出されることにより、山陰海岸の統一感が創出されるのではないだろうか。たとえば、日本海航空会社が運営した水上飛行機事業の場合、その舞台となるのは城崎温泉、円山川、湖山池であり、さらに隠岐ジオパークへと広がっている。このように、個別ジオサイトだけでなく、ジオサイト間をつなぐストーリーは多様に存在し、それをジオパークにおけるジオサイト間ストーリーとして再構築することで、来訪者／旅行者の地域理解が促進されるものと考えられる。

そこで重要となるのが、ジオガイドのネットワーク化であろう。各地に点在するジオガイドが互いに顔見知りとなり、お互いのジオサイトや拠点施設、ジオガイド自身を来訪者／来街者に紹介することができれば、山陰海岸の空間的広がりを彼ら／彼女らが認識し、将来的に多様な行動を生み出のではないだろうか。

実際、山陰海岸では、2010年より推進協議会が主催するジオガイド交流会が行われている。また、鳥取市では2011年より県内ガイド団体を対象とした鳥取県ジオガイド交流会をスタートさせ、その動きは拡大している。さらに、2011年３月11日の東北地方太平洋岸大地震と津波を受け、山陰海岸を中心に日本全国のジオパーク関係者がジオコミュニケーション推進グループを立ち上げ、国内でのネットワークを構築した。

そこで、本稿は世界ジオパークである山陰海岸におけるジオガイドのネットワークの構築やその広域化について、ジオガイドの特性や鳥取県ガイド交流会、ジオコミュニケーション推進グループの活動に着目して明らかにすることを目的とする。以下、２では山陰海岸の地域概要について詳述し、３では、ジオガイド団体の分布やガイド養成状況、いわみガイドクラブの利用実績から山陰海岸におけるジオガイド特性を明らかにする。４では、鳥取県ジオガイド交流会を事例に、山陰海岸内でのガイドネットワークの構築について明らかにする。さらに、SNS（twitter）を活用して広域なネットワークを形成しているジオコミュニケーション推進グループの活動についても詳述し、山陰海岸内外のネットワーク構築とその広域化について検討する。

２．山陰海岸ジオパークの概要

2.1.　山陰海岸ジオパークの地域的概観

「日本海形成に伴う多様な地形・地質・風土と人びとのくらし」をテーマとする山陰海岸は東西110km、南北最大30kmあり、３府県６市町にまたがる世界ジオパークである（図１）。山陰海岸推進協議会が運営する公式ホームページでは、ジオサイト百選が公開されており、これらのジオサイトを中心として、教育活用やジオツーリズム振興が推進されている。

山陰海岸エリア内では、JR山陰本線が鳥取駅から豊岡駅まで通り、2011年４月から土日のみ快速列車「山陰海岸ジオライナー」の運行が始まった。豊岡駅から丹後大宮駅までは北近畿タンゴ鉄道宮津線が通っている。内陸では国道９、312、482号線が、海岸線では国道178号線が豊岡市を結節点としてジオパークの東西を結ぶ。さらに、2011年12月現在、建設が進む鳥取豊岡宮津自動車道（鳥取―宮津、120km）では、2005年３月に香住道路（香住―佐津間）、2008年11月に東浜居組道路（東浜―居組間）、2010年12月に余部道路（余部―香住間）の供用が開始され、東西を結ぶ自動車交通の利便性向上に寄与している。なお、当該道路は三府県議会議員の会により「ジオパークロード」という愛称が付けられており、看板も建てられている。

山陰地方以外の地域から山陰海岸へのアクセスを見ると、鳥取市には鳥取空港が、豊岡市には但馬コ

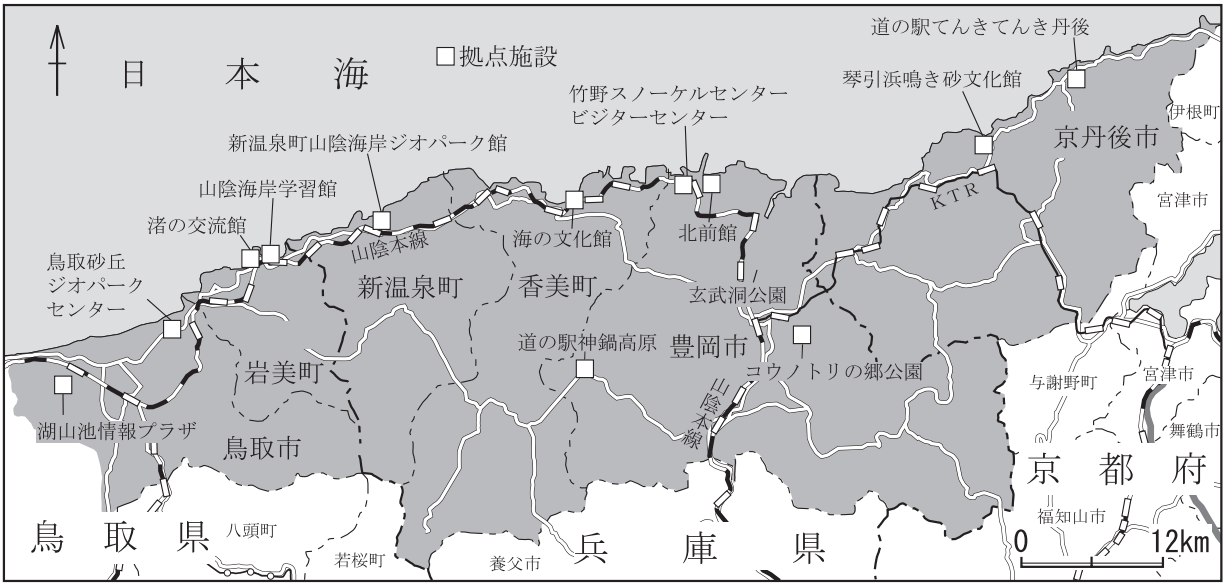

図１　山陰海岸ジオパークの概観（2011年）
（山陰海岸ジオパークパンフレット、現地調査により作成）

ウノトリ空港が立地しており、鳥取空港では東京便が１日４便と国際チャーター機が、但馬コウノトリ空港では大阪（伊丹）便が１日２便、就航している。高速道路をみると、鳥取自動車道、播但連絡道、北近畿豊岡自動車道、京都縦貫道が整備されており、自家用車を使って関西方面から山陰海岸まで２、３時間程度の距離となっている。

山陰海岸の運営は各市町が中心となって行われている（新名2010、2011）。鳥取県では山陰海岸ジオパーク鳥取県連絡協議会を設立し、情報交換を行っている。新温泉町では2010年にジオパークネットワークを設立した。香美町ではジオパーク協議会とファンクラブが組織されている。統一してみられるサインは、のぼり旗、看板、ロゴマーク、パンフレット類である。

山陰海岸がホームページに掲載しているパンフレットによると、2011年12月時点でエリア内に拠点施設は７か所ある。博物館である鳥取県立博物館付属山陰海岸学習館（岩美町）、資料館である新温泉町ジオパーク館（新温泉町）、海の文化館（香美町）では、山陰海岸に関する広域的な情報を展示解説している。一方、玄武洞公園案内所（豊岡市）や鳥取砂丘ジオパークセンター（鳥取市）では、特定ジオサイトに特化したパネル展示やガイドが行われている。道の駅てんきてんき丹後（京丹後市）では丹後半島の情報コーナーが設置され、岩美町立渚の交流館（岩美町）ではシーカヤックやシュノーケル、ジオガイド等の自然体験交流施設となっている。

上記の７施設以外にも、ジオパークに取り組む施設が各地に点在している。鳴き砂文化館（京丹後市）、北前館、竹野スノーケルセンター／ビジターセンター（以上豊岡市）、おもしろ昆虫化石館（新温泉町）、湖山池情報プラザ（以上、鳥取市）といった施設では特定のジオサイトやテーマに特化した展示が行われている。さらに、各地の道の駅や玄武洞ミュージアム、コウノトリの郷公園の土産物販売所では、ジオパークに関する土産物が販売されている。

2.2.　山陰海岸ジオパークにおける活用の進展

2010年10月に世界ジオパーク認定を受けた山陰海岸では、各地でジオパークの活用が進展した。2010年から2011年10月までの山陰海岸におけるイベント・ツアー等の件数と内訳をみると、2010年はイベントが78件中76件と最も多かったが、2011年に入ると、ジオツアーや講演会・シンポジウムが急増し、全体で182件と前年比2.5倍になった（図２）[2]。イベントの中には、ジオパークに特化したものもあるが、

2　本データは2011年10月時点に山陰海岸推進協議会ホームページに掲載されている260件のデータを基にしている。

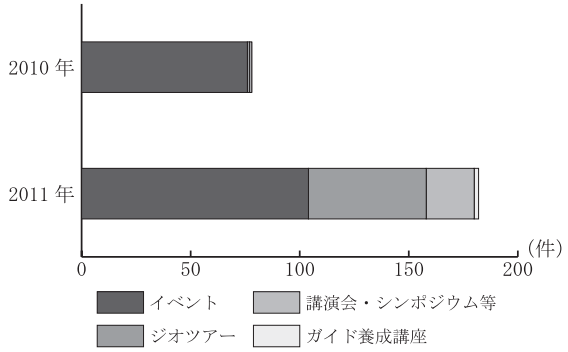

図２　山陰海岸ジオパークにおけるイベント・ツアー等の開催件数の推移（2010-2011年）
（山陰海岸ジオパーク推進協議会ホームページより作成）

その多くが地域の既存イベントにジオパークを活用するものである。例年開かれる但馬まるごと感動市[3]では、山陰海岸フェスティバルも同時開催され、但馬地方のみならず京丹後市、岩美町、鳥取市に位置するジオパーク拠点施設も体験コーナーや紹介パネルを設置し、多くの来場者をむかえた。ここではジオガイド交流会や学術研究奨励事業の研究発表会が開かれた。

2010年から2011年にかけてのイベントやツアーの開催地をみると、鳥取砂丘が23回と最も多く、次いで神鍋高原14回、湖山池９回となっていた（図３）。開催件数が最も多い鳥取砂丘では、「ジオものがたりの旅」や「砂丘の不思議発見隊」といったジオツアーが開催されたほか、2010年には砂像を展示した砂の美術館が、2011年にはゆるきゃらカップなどが開かれた。さらに、これまで課題として挙げられていた内陸部も神鍋高原をはじめとした国道９号線沿いの地域を中心に活用が進んできている。神鍋高原では火山地形を活かした溶岩流散策が行われ、冬季にはスノーシューウォーキングや周辺スキー場でのジオパークの活用がみられる。香美町小代区では、但馬牛を用いた食のイベントが開かれ、上山高原（新温泉町）では霧ヶ滝トレッキングや上山高原ハイキングが開催された。

来訪者や観光客に目を向けると、ジオパークが観光地として認識され、観光行動においても目的地となっていることが確認できる。鳥取市若者会議が2011年12月３日にとりぎんバードスタジアムでホーム、アウェイ両サポーターを対象に行ったアンケート調査では、ガイナーレサポーターがアウェイサポーターに紹介したい観光地として鳥取砂丘（205人、68.3%）が最も多く選択され、次いで水木しげるロード（163人、54.3%）、山陰海岸（139人、46.3%）となっており、鳥取県内においても、ジオパーク自体が観光資源として認識されていることがうかがえる（表１）。さらに、第４位に浦富海岸（105人、35.0%）、

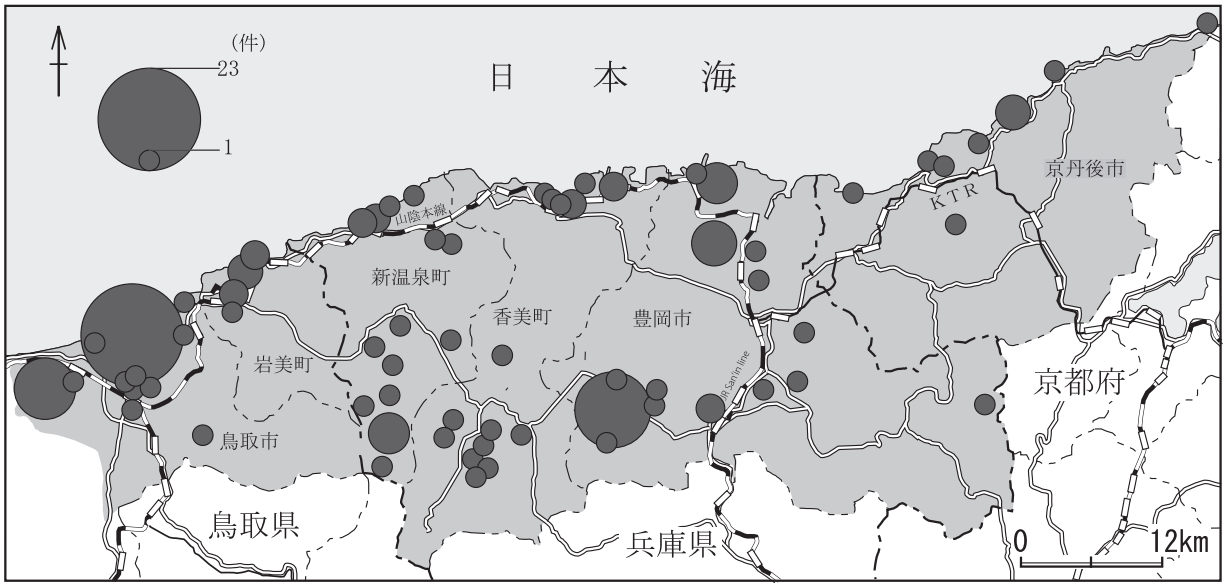

図３　山陰海岸ジオパークにおけるイベント開催地（2010-2011年）
（山陰海岸ジオパーク推進協議会ホームページにより作成）

3　但馬まるごと感動市は但馬ドーム（豊岡市）を会場に、但馬地方（豊岡市、養父市、朝来市、香美町、新温泉町）に立地する企業・団体が出店し、特産品を販売する一大イベントである。

第６位に白兎海岸（93人、31.0％）、第10位に賀露港（61人、20.3％）と、上位10か所の内、山陰海岸関連地域が５か所選ばれていた。これらの地域は既存観光地であるため上位に位置していると考えられる。

一方、来場した愛媛FCサポーターをみると、アンケート回答者113人中64人が「観光する」と回答した。その内、鳥取砂丘（44人、68.8％）が最も多く、次いで山陰海岸（14人、21.9％）、温泉・水木しげるロード（各６人、9.4％）となっており、ジオパーク自体が観光における目的地となっていた[4]（表２）。

表１　ガイナーレサポーターがアウェイサポーターに勧める観光地上位10か所（2011年12月３日）

観光地	回答者数（人）	割合（％）（ｎ＝300）
鳥取砂丘	205	68.3
水木しげるロード	163	54.3
山陰海岸ジオパーク	139	46.3
浦富海岸	118	39.3
大山	105	35.0
白兎海岸	93	31.0
とっとり花回廊	77	25.7
温泉	69	23.0
隠岐	64	21.3
賀露港	61	20.3

注　複数回答

（鳥取市若者会議アンケート調査により作成）

表２　愛媛FCサポーターの主な観光目的地（2011年12月３日）

	回答者数（人）	回答率（％）（ｎ＝64）
鳥取砂丘	44	68.8
山陰海岸ジオパーク	14	21.9
温泉	6	9.4
水木しげるロード	6	9.4
白兎海岸	4	6.3
青山豪昌ふるさと館	4	6.3
道の駅かわはら	3	4.7
仁風閣	2	3.1
湖山池	2	3.1
そば道場	2	3.1
燕趙園	2	3.1
東郷湖	2	3.1
蒜山	2	3.1
河原城	1	1.6
賀露港	1	1.6
雨滝	1	1.6
出雲大社	1	1.6
境港	1	1.6
その他	5	7.8

注　試合観戦に伴い、観光を行うと答えた64件のデータに基づく。

（鳥取市若者会議アンケート調査により作成）

３．山陰海岸ジオパークにおけるジオガイド

ジオガイドを「ジオパーク案内」と広義に捉えた場合、その形態は人が行う場合と、拠点施設を訪れる場合、看板やガイドブック、ウェブサイトなどの文字情報を介する場合がある。ここでは人を介して行う場合に限定し、彼ら／彼女らを「ジオガイド」として捉え、以下、各種データからジオガイドについて明らかにする。

3.1.　ジオガイド団体の分布とガイド養成

山陰海岸には少なくとも37団体のガイド組織が存在する（図４）[5]。有償ガイドは37団体中25団体（67.6％）あり、無償ガイドは11団体（29.7％）、未定が１団体（2.7％）となっており、有償のガイド団体が中心となっている（図５）。ガイド料金は団体毎に異なり、ガイド一人当たりにかかる料金設定を行っているものと、ガイド１回あたりに係る料金設定を行っているものがある。ガイド料金の平均は１回につき1,800円程度であった。１か月あたりの平均利用者数が判明した17団体をみると、玄武洞公園無料ガイドの3,858人[6]が最も多く、１団体あたりの平均案内人数は514人／月であった。

先述のイベント等の開催地と同様に、内陸部にもガイド団体は分布している。ジオガイド団体自体は、山陰海岸の西側に多く分布している。市町別内訳をみると、香美町と新温泉町に各10団体、鳥取市が７団体、豊岡市が５団体、京丹後市と岩美町が各２団体となっている。最も団体数の多い香美町の場合、

4　愛媛県西予市では四国西予ジオパーク構想を立ち上げ、ジオパークに取り組み始めた。
5　山陰海岸推進協議会主催のジオガイド交流会資料では37団体が紹介されているが、ジオパークのエリア内で実際、活動しているガイド団体すべてを網羅しているとは限らない。
6　期間は平成23年４月から９月までである。

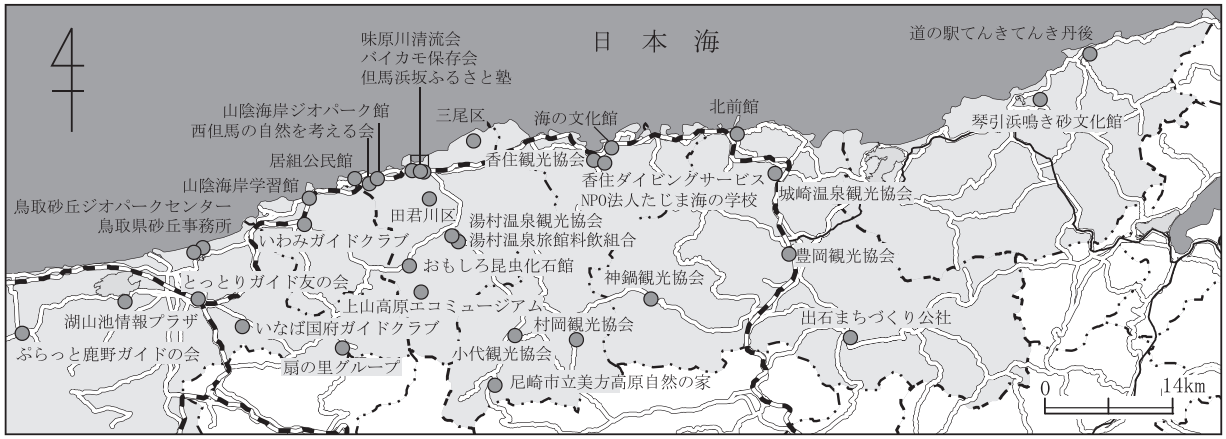

図４　山陰海岸ジオパークにおけるジオガイド団体の分布（2011年）
（山陰海岸ジオパーク推進協議会主催ガイド交流会資料により作成）

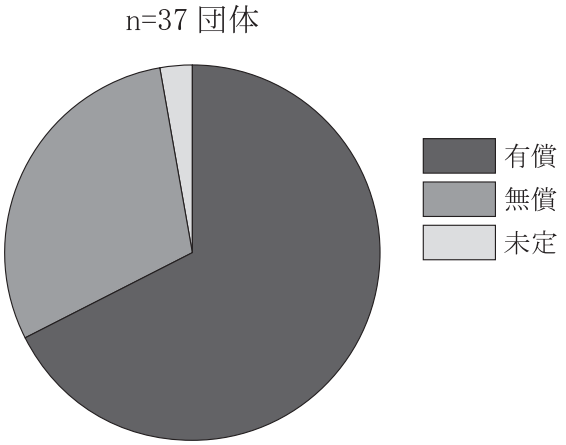

図５　山陰海岸ジオパークにおけるガイド団体の有償・無償の別（2011年）
（山陰海岸ジオパーク推進協議会主催ジオガイド交流会資料により作成）

図４にもあるように、その分布は10地点とはなっていない。これは、香住観光協会が岡見公園、御崎平家の里、今子浦、余部橋梁の４か所のガイド窓口を担当し、香住ダイビングスクールとNPO法人たじま海の学校が同一地点に立地しているためである。また、新温泉町の場合、10団体の内、山陰海岸館や湯村温泉観光協会、湯村温泉旅館料飲組合を除く７団体は、民間団体や町内会が中心となって活動しており、地域での活動にジオパークが取り入れられ始めている。

ジオガイド養成についてみると、山陰海岸では、推進協議会が直接ジオガイドの養成を行うのではなく、地域や団体がそれぞれに講座を開き、ガイドを養成している。そのため、山陰海岸にはガイドが身につけておくべきガイド内容、スキルに関する基準は現時点では存在しない[7]。2011年度に開催された京丹後市、香美町、岩美町でのガイド養成講座では、山陰海岸の総論と、個別地域の各論、実際に現地でガイドする実践の３つで構成される（表３）。

京丹後市の場合、丹後半島を対象とした地形学、地質学が中心となっているのに対し、香美町今子浦や岩美町では地形学と地質学に加え、生物、歴史、文化、食といった幅広いテーマでの講義が行われている。香美町今子浦では総論、各論、ガイド実践に加え「救急法トレーニング」、「スクールインタープリター講習」が行われ、ガイド時のリスクマネジメントや分りやすく伝えるガイドスキルの向上が図られている。岩美町では後述のいわみガイドクラブがガイドのレベルに合わせた養成講座を開催している。初級編では総論と各論の講座が設けられ、中級編では、城原海岸展望台や荒砂神社、鴨ヶ磯駐車場展望台など、現地での実践講座が行われている。

7　現在のところ基準は存在しないが、ガイド品質保証やガイド時のリスクマネジメント、外国語ガイドの必要性といった観点から、認定ガイドシステムを構築しようとする動きもみられる。外国語ガイドについては通訳案内士の資格が必要となる可能性も高いが、当該資格の合格率は平成22年度平均12.9％（日本政府観光局ホームページによる）であり、取得が難しい資格となっている。

表３　山陰海岸ジオパークにおけるガイド養成講座(2011年)

地　域	講座名
京丹後市	日本海の拡大 堆積岩と環境 断層と地殻変動 火山岩と丹後半島 山陰海岸ジオガイド
香美町 今子浦	ジオパーク総論 救急法トレーニング スクールインタープリター養成入門講座 今子浦の岩石・地層について 今子浦の文化、歴史、産業について 今子浦の四季の自然について 今子浦ジオツアー
岩美町	（初級編） ジオパークとは・山陰海岸ジオパークについて 浦富海岸の歴史・文化、浦富海岸の地形・地質 日本海の生き物、岩美町のグルメ 山陰海岸の植物、浦富海岸周辺の植物 浦富海岸以外の岩美町のジオスポットとまとめ （中級編） 城原海岸展望台・城原カーブミラー展望所 荒砂神社周辺 鴨ヶ磯駐車場展望台・鴨ヶ磯降り口展望台 西脇海岸周辺

（京丹後市地域再生協議会、NPO法人たじま海の学校、岩美町観光協会の各チラシにより作成）

3.2.　ジオガイドの利用状況
～いわみガイドクラブを事例に～

いわみガイドクラブは2001年より鳥取県岩美町をフィールドとして活動を開始した山陰海岸を代表するガイド団体の一つである。2009年からは岩美町観光協会を窓口としてガイド依頼を受けている。2011年12月時点でガイド22名が在籍しており、ジオパークの他にも、町内の自然や歴史、文化に関するガイドを行っている。先述のとおり、いわみガイドクラブではジオガイド養成講座（初級編、中級編）も開催している。ここでは、2009年以降のいわみガイドクラブのガイド実績から、ジオガイドの利用状況について明らかにする。

いわみガイドクラブのガイドは有料であり、料金は時間と人数別に設定されている（表４）。基本となるのは、２時間で、ガイド一人につき20人までが3,000円、20人以上30人以下がガイド２人で6,000円、30人以上がガイド２－３人で9,000円となっている。２時間以上になる場合は、料金は要相談となっている。

2009年から2011年11月までのいわみガイドクラブにおけるガイド実績は総件数107件、総人数3,481人であった（表５）。その利用件数および利用者数は年々増加傾向にある。2009年は利用件数20件、利用者数585人であったのに対し、2010年は36件、1,037人、2011年は51件1,859人と増加しており、2009年から2011年にかけての増加率は利用件数で217.8％、利用者数で155.0％であった。１件当たりの平均利用者数は2009年が29.2人、2010年が28.8人であったのに対し、2011年度は11月までで32.5人と増加している。

利用者属性は、個人客よりも団体客の利用が中心であった。利用件数及び利用者数が最も多いのが企

表４　いわみガイドクラブのガイド基本料金(2011年度)

案内人数（人）	ガイド人数（人）	料金（円）
１～20	1	3,000
20～30	2	6,000
30以上	２～３	9,000

注）２時間の利用料金

（岩美町観光協会提供資料により作成）

表５　いわみガイドクラブの利用件数及び利用者数の推移（2009-2011年11月）

	2009年		2010年		2011年		合　計	
	人数（人）	件数（件）	人数（人）	件数（件）	人数（人）	件数（件）	人数（人）	件数（件）
企業・団体	349	13	324	14	569	19	1,242	46
イベント	150	2	140	1	369	4	659	7
公民館	83	3	185	6	186	8	454	17
学校関係	0	0	58	3	396	3	454	6
旅行代理店	0	0	225	7	206	8	431	15
講習会	0	0	100	2	90	3	190	5
個人	3	2	5	3	43	6	51	11
合　計	585	20	1,037	36	1,859	51	3,481	107

（岩美町観光協会提供資料により作成）

業・団体（46件、1,242人）であり、次いで公民館（17件、454人）となっている。この２つを除く利用件数では、旅行代理店（15件）、個人（11件）であり、同様に利用者数ではイベント（659人）、学校関係（454人）、旅行代理店（431人）の順であった。

利用者の発地が判明した110件のデータを基にガイド利用の地理的範囲を見ると、鳥取県を中心に近隣県、三大都市圏、ジオパークに取り組む地域からの利用が見られる（図６）。府県別にみると、鳥取県からの利用が78件（70.9％）と最も多く、次いで島根県と兵庫県の各６件（5.5％）となっている。県外からの利用のみをみると、県外利用23件中11件（47.8％）が旅行代理店であり、次いで企業・団体（７件）、個人（４件）となっており、公民館の利用は見られなかった。

次に、鳥取県内でのガイド利用をみると、鳥取市が県内利用総件数78件中38件（48.7％）と最も多く、次いで岩美町26件（33.3％）、智頭町４件（5.1％）となっており、鳥取市および岩美町で県内利用全体の82.0％をも占める。その内訳は、企業・団体41件

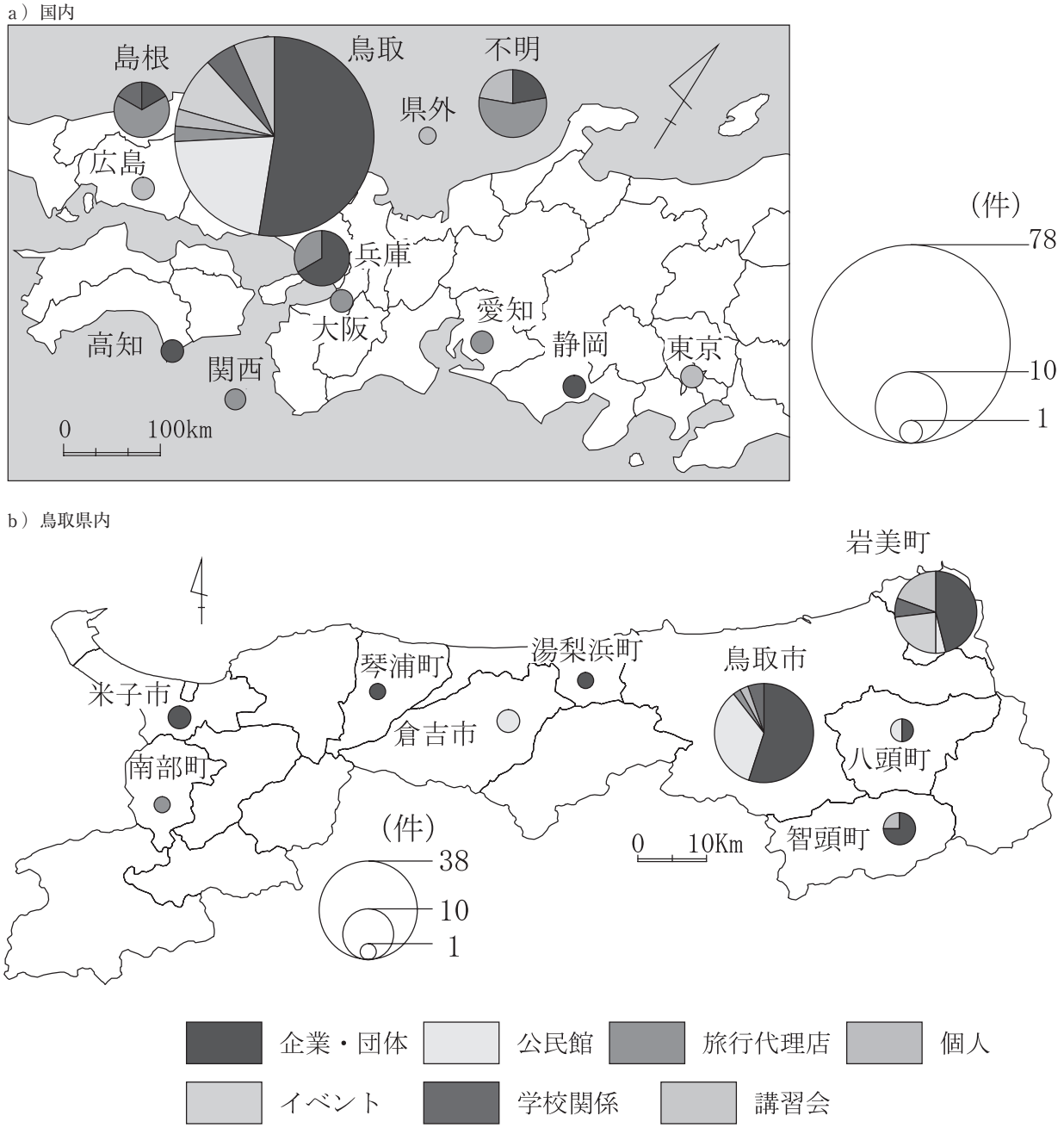

図６　いわみガイドクラブ利用者の発地（2009-2011年11月）

（岩美町観光協会提供資料により作成）

(52.5%)、公民館17件(21.8%)、イベント6件(9.0%)の順となっており、県外利用では見られなかった公民館の利用が鳥取市を中心に行われているのが特徴的である。

利用者の月別推移では、秋の行楽シーズンが繁忙期となっており、次に5月から7月にかけての春先に利用者が増加する傾向にある(図7)。降雪のある冬季には利用者が減少しており、春秋を中心としたガイドニーズがあるといえる。曜日別にみると、土曜日の利用が107件中24件と最も多く、次いで、日曜日(19件)、水曜日(17件)となっており、週末のみならず平日も企業・団体や公民館、旅行代理店等に利用される状況にある(図8)。

ガイド地点が判明した99件のデータを基に案内地点をみると岩美町全域ではなく、岩美町北西部にある網代港から羽尾岬までの浦富海岸を中心に、岩井温泉や田村虎蔵、蒲生峠でガイドが行われていた(図9)。最も多くガイドされている地点は城原海岸(99件中53件、53.5%)であり、次いで鴨ヶ磯(32件、32.3%)、熊井浜・鴎鳴荘[8](13件、13.1%)、遊覧船・浦富海岸・網代港(各10件、10.1%)となっている。

以上のことから、利用件数および利用者数が増加

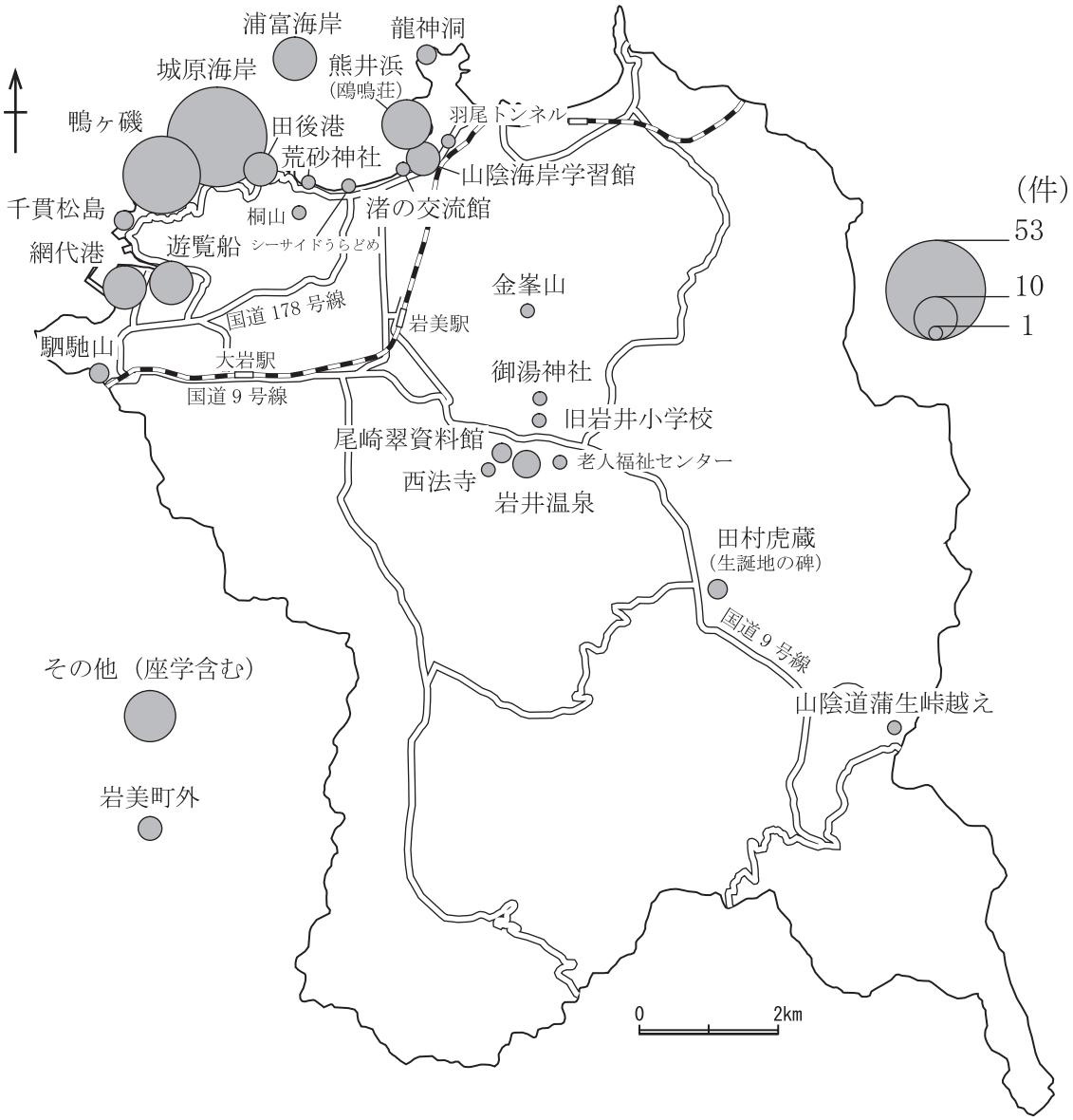

図7　いわみガイドクラブのガイド地点およびその件数(2009-2011年11月)
(岩美町観光協会提供資料により作成)

8　熊井浜はジオパークの他に人権学習としても利用される場所である。

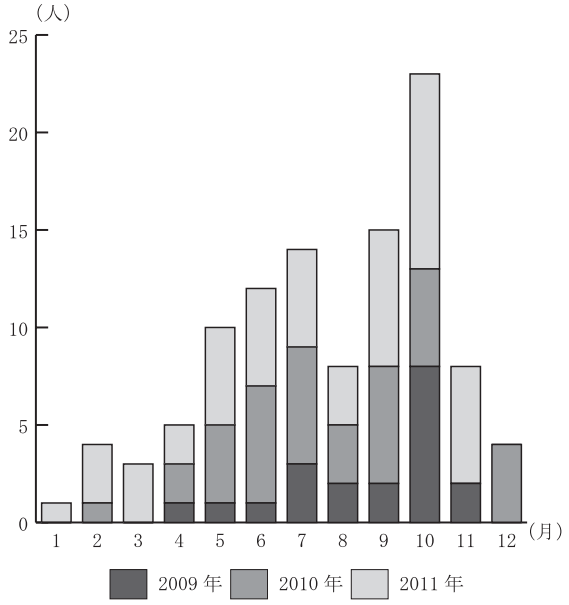

図８　いわみガイドクラブにおける月別利用者数の推移（2009-2011年11月）
（岩美町観光協会提供資料により作成）

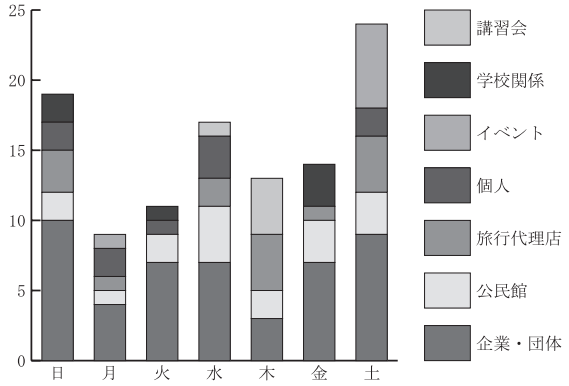

図９　いわみガイドクラブにおける曜日別利用者数の推移（2009-2011年11月）
（岩美町観光協会提供資料により作成）

傾向にあるいわみガイドクラブのガイド利用状況は、鳥取県東部の団体利用が中心であり、主に浦富海岸を中心としたガイドが春季もしくは秋季に行われている特徴がある。また、団体利用が多いことから、曜日変動の影響を必ずしも受ける状況にはないといえよう。

４．ガイドネットワークの構築

4.1.　山陰海岸ジオパークにおけるガイドネットワークの構築～鳥取市ガイド交流会を事例に～

山陰海岸ではガイド団体のネットワーク構築が始まった。というのも、先述のとおり、山陰海岸は３府県６市町にまたがり、広域連携で推進するジオパークであるため、ジオストーリーに基づき、行政界を超えたつながりを形成し、来訪者や観光客をお互いの地域へと誘導するガイドシステムを構築する必要がある。実際、他のジオサイトや地域への問い合わせも増えてきており、ジオガイドがジオパークエリア内の概要を把握する必要が生じている。山陰海岸推進協議会では年に１回、山陰海岸フェスティバル内でジオガイド交流会を開催している。2011年11月に開催された際には、ジオガイド２名の司会進行の元、各地のジオガイドが一堂に介し、自己紹介や意見交換が行われた。

鳥取県では山陰海岸ジオパーク鳥取県連絡協議会からの提案を受け、2011年２月から鳥取県ジオガイド交流会が始まった。この交流会は山陰海岸の鳥取県内のガイド関係者の連携を図り、ガイドのスキルアップ、情報共有を行う目的で設立され、12月より独立した組織となった。このジオガイド交流会には、鳥取県内に位置するジオパーク関連ガイド団体、拠点施設、遊覧船事業者、地域団体等12団体が参加している（図10）。

参加団体には、先述のいわみガイドクラブの他に、とっとり観光ガイド友の会、国府ガイドクラブ、ぷらっと鹿野ガイドの会がある。鳥取市観光協会に事務局があるとっとり観光ガイド友の会は冬期を除き、鳥取城跡・仁風閣入口に小屋を設置し、来訪者や観光客に無料でガイドを行うほか、有料で鳥取砂丘、市街地食べ歩き散策のガイドを行っている。因幡万葉歴史館内に事務局があるいなば国府ガイドクラブは旧国府町全域をガイドエリアとし、万葉の歴史散策や自然ガイドを行っている。鹿野往来館に事務局があるぷらっと鹿野ガイドの会は、山陰海岸エリア内には位置していないものの、鹿野断層がジオサイトとして指定を受けているため、それをガイドする役割を担っている。

拠点施設では、山陰海岸学習館、岩美町立渚交流館、鳥取砂丘ジオパークセンター、湖山池情報プラザが、遊覧船事業者として株式会社山陰松島遊覧が参加している。鳥取砂丘には鳥取砂丘ジオパークセ

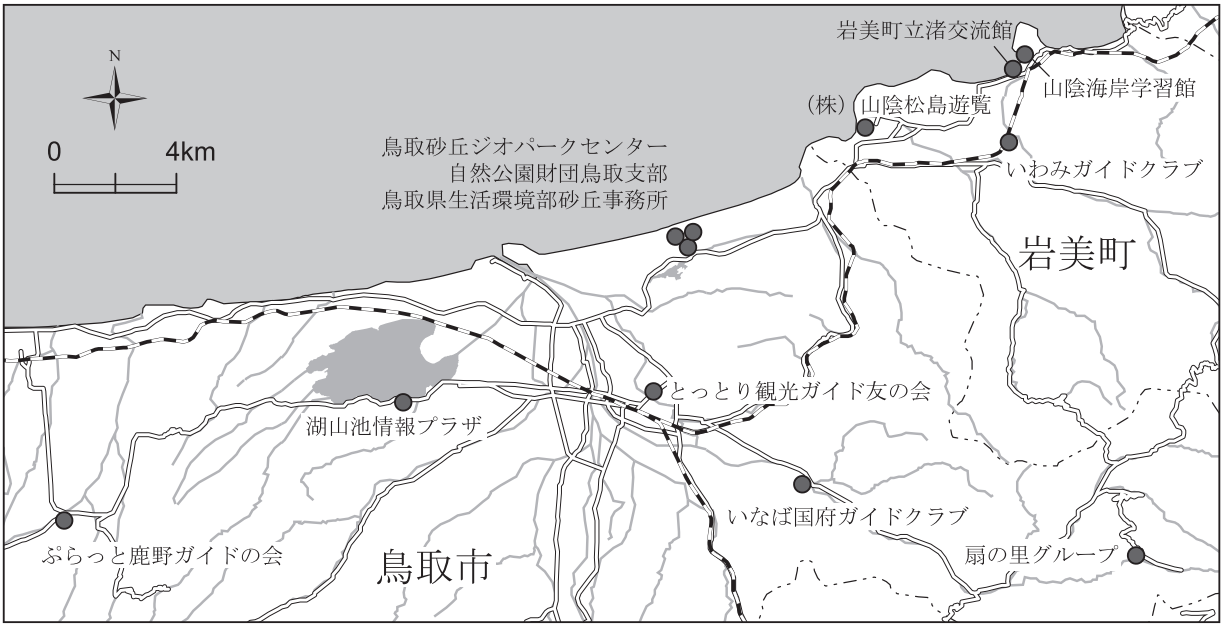

図10　鳥取県ガイド交流会参加組織の分布（2011年）
（鳥取ガイド交流会資料により作成）

ンターの他に、自然公園財団鳥取支部と鳥取県生活環境部砂丘事務所が立地しており、３団体が連携して、鳥取砂丘のジオパーク活動を推進している。

地域団体には、中山間地域の地域振興に取り組む上地集落の扇の里グループがある。集落内に立地する扇の里交流館を拠点に、都市農村交流やわじっこクラブなどの開催の際にジオツアーを開催するほか、地域の特産品のケチャップやカキモチ、しゃぶしゃぶ餅にジオパークのロゴマークを使用しており、ジオパークを中山間地域活性化策の一つとして取り入れている。

これらのガイド団体は鳥取県ジオガイド交流会を通じて、お互いの地域理解を深めている。この交流会は2012年１月時点で８回開催された（表６）。第６回までは、鳥取市が運営と事務局を担当していたが、第７回に交流会代表が決定し、独立した組織となった[9]。参加に際し、交通費や時間給の支給はなく、実費負担となっているものの、毎回10名を超える参加者がみられる。交流会では鳥取県内のジオパーク該当地域の現地見学会が開かれ、当該地域のガイドが他地域のガイドを案内している。そこでは、ガイド内容やメニューの改善に向けた提案や感想が出され、当該地域でのジオガイドに反映されている。

第６回の交流会では、ガイドの有償化について議論され、第７回の交流会では香美町のジオパーク関係者も参加し、ガイドスキルアップ講習として救急時の対応などの安全講習が開かれた。１月12日に開かれる第８回交流会では、鳥取市が主催となり、山陰海岸全域のガイド団体を対象とした研修会と交流会が、鳥取市のとりぎん文化ホールで開かれた。ここでは、香美町海の文化館のジオパーク推進員による「地域活性化とジオパーク～私たちガイドの役割とは～」の講演が開かれ、その後、参加団体の自己紹介やジオパークで伝えたいことなどが議論された。

このように、山陰海岸ではジオパーク内および鳥取県内のジオガイドのネットワーク化が図られ、ガイド同士の地域や団体に対する相互理解を進めている。鳥取県ジオガイド交流会の場合、香美町からの参加や全域のガイド団体を対象とした講習会の開催にも示されているように、鳥取県内のみならず、山陰海岸全域へとその活動が拡大しており、今後も動向が注目される。

9　事務局は鳥取市が担っており、官民連携が図られている。

表６　鳥取県ジオガイド交流会の活動（2011年）

	開催日	内　容	場　所	参加者数（人）
1	２月17日	・交流の目的について ・交流の内容について ・事務局について	鳥取砂丘（サンドパルとっとり）	18
2	３月22日	・自己紹介 ・現地案内 ・意見交換	湖山池（湖山池情報プラザ）	25
3	４月22日	・ジオパークセンターと鳥取砂丘に関する説明と風紋発生風洞装置の実演 ・現地案内 ・意見交換	鳥取砂丘（鳥取砂丘ジオパークセンター、サンドパルとっとり）	17
4	６月10日	・現地案内 ・扇の里交流館で上地の弁当を食べながら自己紹介	国府町：殿ダム展望→普含寺→雨滝→栃本廃寺→菅野湿原→上地（昼食）→天空の里散策（成器鉱山、夫婦淵）	34
5	９月15日	・現地案内 ・鳥取県ジオガイドの共有情報最新版を配布	鳥取城跡、仁風閣	
6	10月13日	・遊覧船乗船 ・岩美町立渚交流館の概要説明および座談会	浦富海岸（山陰松島遊覧、岩美町立渚交流館）	18
7	12月15日	・現地案内 ・ガイドスキルアップ講習 ・ガイド交流会の進め方 ・本交流会の組織化について	山陰海岸学習館、岩美町立渚交流館	19
8	１月12日	・講演「地域活性化とジオパーク～私たちガイドの役割とは～」 ・自己紹介 ・「ジオパークで伝えたいこと」について	とりぎん文化ホール	約60

（鳥取県ジオガイド交流会資料により作成）

4.2.　twitterを活用したネットワークの構築～ジオコミュニケーション推進グループを事例に～

ジオコミュニケーション推進グループは、2011年３月11日の東北地方太平洋岸地震とそれに伴い発生した大津波をきっかけに組織されたグループである。ここでは、防災や減災に関する意識啓発を目指し自然災害を正しく理解するためのチラシを作成している（写真１）。本チラシの特徴は、①小学６年生が理解できるレベルの平易な文章で記述すること、②A4裏表１枚で完結すること、③全国のジオパークで活用できるように自由記述欄を設けたこと、④日本ジオパークネットワークのホームページから閲覧やダウンロードを可能としたこと、⑤英語版を作成したことの５点が挙げられ、ジオツアーやジオパーク関連講座、地域や家庭での学習といった場面での活用が期待される。

写真１　海の文化館でのチラシの掲示
（2011年　新名撮影）

本活動は2011年３月11日に発生した東北地方太平

洋岸地震と津波をきっかけに、香美町海の文化館のジオパーク推進員がツイッターを通じて防災啓発チラシの作成を呼びかけたことに始まる（表７）。このことに賛同した研究者Ａが、各地の研究者を紹介したことにより人的ネットワークが形成され、「津波」の作成が始まった（図11）。「津波」作成時のメンバー分布は、山陰海岸３人、阿蘇・室戸各１人、オブザーバー２人であったが、津波作成を機に本活動をJGN-ML等のジオパーク関連MLで紹介し、参加者を募ったところ、洞爺湖有珠山、茨城県北、伊豆大島、南アルプス、山陰海岸、島原半島等ジオパーク関係者６人と、北九州市立博物館学芸員１人の計７人が参加し、参加者13人、オブザーバー２人となった。

地理的距離はICTの活用で克服した。震災直後は、twitterやメールでのコミュニケーションが取られていたが、３月20日にはメーリングリストが立ち上がり、twitterとメーリングリストを活用した議論が始まった。チラシ作成過程は、テーマの決定、掲載する５項目の選定、文章・イラストの作成および

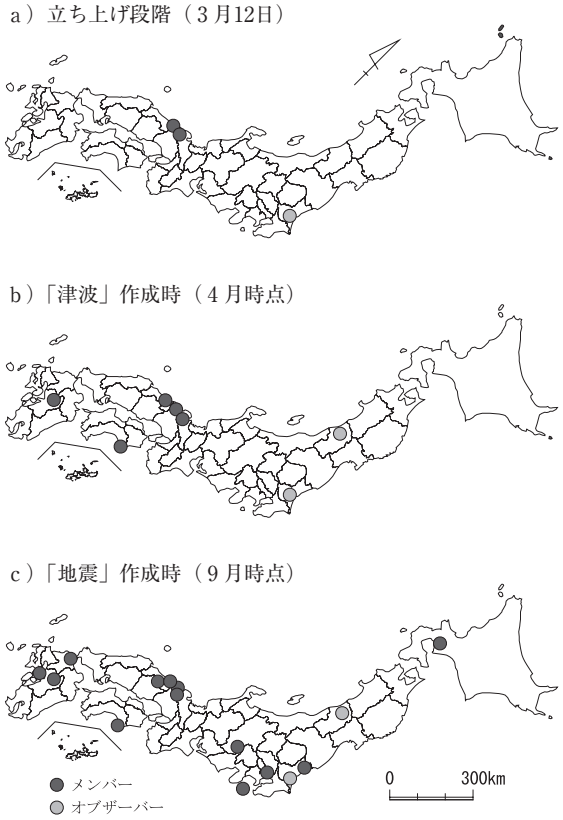

図11　ジオコミュニケーション推進グループ参加者の分布（2011年）
（メール等の記録により作成）

表７　ジオコミュニケーション推進グループの活動（2011年）

月	日	事　　項
3	11	東北地方太平洋沖地震発生、海の文化館でチラシの作成が始まる
	12	twitterでチラシ作成に関する情報を発信
		初期メンバー（３人）で協議が始まる
	15	図表の作成許可申請を行う
	16	twitterおよび紹介により新メンバー（２人）が参加
	20	津波チラシミッションが立ち上がる
		twitterおよび紹介により新メンバー（２人）が参加
		メーリングリスト（参加者７人）が立ち上がり、ML上で本格的な議論が始まる
4	5	日本語版津波チラシの初稿完成
	8	英語版津波チラシの初稿完成
	9	日本語版津波チラシの修正稿完成（ルビ等）
	10	次回作についての議論がスタート
	12	英語版津波チラシの修正稿完成
	15	日本ジオパークネットワークのホームページに掲載
	21	海の文化館（香美町）で記者発表
	22	JGNメーリングリストへの情報提供
		室戸でプレスリリース
	24	ML等での紹介により新メンバー（３人）が参加（計10名）
	27	第２弾「地震」チラシの作成スタート
	30	ML等での紹介により新メンバー（２人）が参加（計12名）
5		「地震①」および会の名称についての議論を行う
6	6	ML等での紹介により新メンバー（２人）が参加（計14名）
7		「地震①」および会の名称についての議論を行う
9		日本語版・英語版地震チラシ完成

（twitterおよびメール等の記録により作成）

校正、英訳の４段階に分けられる。

「津波」作成時、チラシ内で用いるイラストは他の文献からも引用していたが、「地震①」では全てオリジナルイラストを作成した。これは著作権の問題を解決するためであった。オリジナルイラストを作成することにより、これらを日本ジオパークネットワークで共有可能とし、ジオツアーや教育活用を容易にすることを意図している。

本活動は国内のジオパーク関係者でネットワークされたが、時間が経つにつれその議論自体、活発に行われなくなってきている。というのも、本活動は有志が主体となって、ボランティアで行われているものであり、繁忙期となると活動を継続できないという現状がある。議論できない状態が続くと、本活動自体の継続に困難が生じるであろう。

５．おわりに

2010年に世界ジオパークネットワーク加盟認定を受けた山陰海岸では、課題とされていた内陸部の活用も進み、ジオパーク自体が来訪者／観光客の目的地となってきている。しかしながら、全域共通ののぼり旗、看板、ロゴマークの使用を除くと、実際の活動は地域的に限定されたものになっていた。というのも、山陰海岸は３府県６市町が広域連携で推進しているため、主要メディアが異なり、情報フローが行政界で地域的に限定されている。また、ジオガイドの養成や拠点施設も、特定エリアやジオサイトに特化するものが多く、行政界を超えた地域間連携の蓄積が待たれるところである。

一方で、2010年の世界ジオパークネットワーク加盟以降の動きをみると、該当地域内外を結ぶ人的ネットワークが徐々に構築され始め、広域化している。山陰海岸におけるジオガイド団体は、西側を中心に分布しており、全体の７割が有料でガイドを行っている。ジオガイド養成には認定制度等はなく、各市町および各団体が担っているため、品質保証やリスクマネジメントの点で課題が出てきており、今後、その克服が求められる。

山陰海岸を代表するガイド団体であるいわみガイドクラブでは2009年以降、利用件数および利用者数が増加している。個人旅行者よりも鳥取県東部の団体利用が多く、曜日変動の影響を必ずしも受ける状況にはない。ガイドニーズは秋季、春季に多く、城原海岸や鴨ヶ磯を中心とした浦富海岸でのガイドが行われている。

ガイド養成およびガイド自体、基本的に特定ジオサイトや市町内で行われているため、他地域の情報を得ることが難しい状況にある。そこで始まったのが山陰海岸推進協議会主催のジオガイド交流会と鳥取に位置するガイド団体で組織された鳥取県ジオガイド交流会である。前者は、山陰海岸エリア内に位置するガイド団体が年に一度、開催された交流会に参加し、意見交換を行うものであった。これに対し、後者は２か月に１度の割合で、現地ガイドと意見交換、ガイドスキルアップ研修を行うものであった。香美町からの参加者もあり、鳥取県内に留まらない交流会へと発展している。また、鳥取県のように、定期的にジオガイド交流会を行うことにより、ガイド同士の相互理解が進むと考えられる。今後は、このジオガイド交流会を基に形成されたネットワークを活用したジオパーク推進活動が行われることが望まれる。

このような山陰海岸内でのネットワーク構築の他に、山陰海岸以外の地域とのネットワーク構築が見られる。それが、東日本太平洋岸地震と津波を受け、海の文化館のジオパーク推進員を中心に立ち上がったジオコミュニケーション推進グループである。このグループは、日本ジオパークネットワークを活用して、北海道から九州までのジオパーク関係者13名、オブザーバー２名が参加して、防災や減災に関する意識啓発を目指し自然災害を正しく理解するためのチラシ作成をスタートさせた。

世界ジオパークネットワーク加盟後、山陰海岸では多様な活動が蓄積され、ジオガイドのネットワーク化も進展した。とはいえ、現時点ではお互いの紹介や地域理解を深める活動が中心であり、ジオサイト間ストーリーに基づいた来訪者／観光客の誘導にはまだ時間が必要であろう。これについては、今後の活動実績の蓄積に期待したい。一方で、観光客お

よび来訪者特性の解明については課題が残る。アンケート調査ではジオパークが観光の目的地となっている状況が見られたが、彼ら／彼女らの情報入手経路や実際の行動パターン、認知空間および行動空間の広がりについて解明することが必要であろう。

謝辞

本研究を進めるにあたり、いわみガイドクラブの油浅郁夫様、福原陽一郎様、岩美町観光協会の福本様、香美町海の文化館の今井裕子様、山陰海岸推進協議会の松原典孝様、鳥取市経済観光課の岡田実様、ジオコミュニケーション推進グループ、山陰海岸ジオパーク並びに日本ジオパークネットワーク関係者の皆様、鳥取市企画調整課、鳥取市若者会議Aグループの皆様に多大なるご協力を賜りました。末筆ながら記して御礼申し上げます。

参考文献

山陰海岸推進協議会事務局　公式ホームページ，http://sanin-geo.jp/（最終閲覧日：2012年１月24日）

新名阿津子　2010．ジオパークに関する調査報告～山陰海岸の世界ジオパークネットワーク加盟に向けて～，TORCレポート33：85-103.

新名阿津子　2011．山陰海岸に関する活動報告，TORCレポート34：191-199.

日本政府観光局　公式ホームページ，http://www.jnto.go.jp/jpn/index.html（最終閲覧日：2012年１月24日）